テーマは「科学保安講習会」

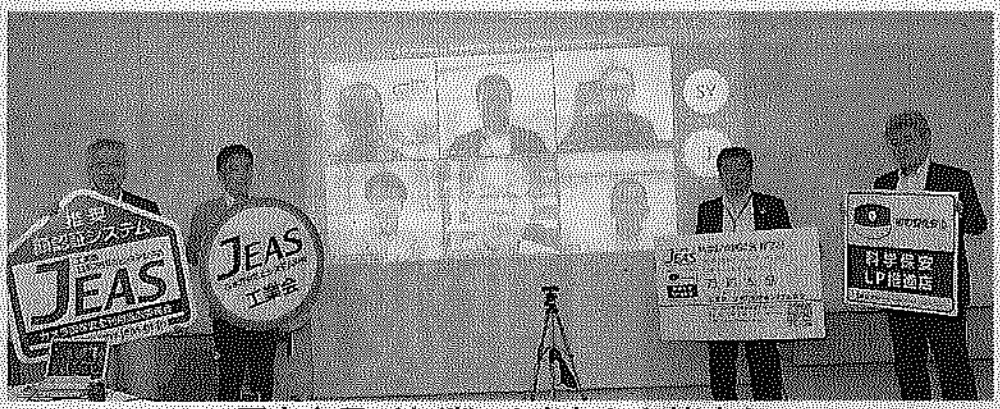
ＪＥＡＳが意見交換会開く

機械と融合した新しい警備へ

日本万引防止システム協会（ＪＥＡＳ・稲本義範会長）は8月10日、都内で「科学保安講習会に向けての対談」と題して意見交換会を行った。協会関係者11人が参加した。

警備会社は山根久和監事（セフト）と青柳秀夫プロジェクトリーダー（日本保安）、林俊一技術スキル向上ＷＧ長（ＪＳＳ）の3社、リモートで佐藤賢二理事（ゴジョウ・ウエイズ）と山内浩司氏（ジャパンプロテクトシステム）の2社が出席した。

意見交換会の目的は、6月の通常総会で可決され10月22日に開催を予定している新プロジェクト「科学保安講習会」に向けて、保安警備の現状と課題を話し合い講習会の目標を確認することだ。同講習会は、保安業務を行う警備会社や顔認証システム開発メーカーなどが参加し、ＪＥＡＳ推奨顔認証システムを使った保安業務や認定個人情報保護団体への理解を深めることを目指す。



稲本会長（左端）と参加した皆さん

意見交換会では次のような意見が出た。

「保安警備は誤認事故のリスクを抱えながらも、捕捉しないと契約につながらない。社会に貢献している自覚を持ち会社の理念にも賛同している優秀な警備員が、賃金など待遇面から退職するケースが少なくない。今後は『科学保安』の取り組みを進めて生産性を上げ、警備員の処遇改善を図ることに期待してプロジェクトに取り組みたい」。

「ベテランの保安警備員の高齢化が進み、若い世代の担い手が入って来ないのが現状だ。保安業務を行う警備会社がない〝保安空白県〟もできている。『科学保安』という形で機械と融合した新しい保安警備を提供することは、業界の今後を考えれば必要だ。警備業とメーカーがタッグを組み、コストを削減しても今までと同等の効果が得られる費用対効果を上げる仕組み作りが求められている」。

「保安警備業務を行っていて思うのは、いろいろと便利なツールが出てきているとは思うが、やはり実際に多くの万引き犯をリアルで見て手口を把握していることから技能に優れた警備員は多いと思う。システムを開発する上で保安警備員がアドバイスをしたり、改良に貢献できる要素はまだまだある。ＪＥＡＳでメーカーと警備会社をつないでもらえたのはありがたく、今後も協力していければと思っている」。（瀬戸雅彦）